

## 過去の知床半島ヒグマ管理方針検討会議での主な発言

## 第 1 回 知床半島ヒグマ保護管理方針検討会議

- ・ 人慣れしたヒグマへの対処法や人の行動のコントロールなど、なぜこれまでできなかったのか、何が弊害となっているのか理由を明確にする。
- ・ ヒグマに対し、捕獲以外の対応策がほとんどない。捕獲する以前の対応策をきちんと実施すべき。捕獲ありきの管理計画では社会的に受け入れられない。
- ・ 捕獲との因果関係をもっと検証すべき。公園内では捕獲を控えてきたから現在の状況にある可能性。管理方針通りに実行しても新たな問題が浮上。その対応策のオプションの一つとして捕獲がある。
- ・ 第 1 期策定時には、ヒグマが餓死するような大量出沒年は想定されていなかった。今後は環境収容力の低下などが予想され、大量出沒を前提とした管理のオプションを考える必要がある。
- ・ 管理目標としてヒグマの頭数を現行水準より減らさないことが挙げられているが、個体数は現在も分からない。このままでは管理の目標が達成できたかどうか検証できず、次の議論に進めない。目標が達成できたかどうか分からず 5 年間で過ぎていく恐れがある。今あるオプションで努力しても達成できないなら、必要なオプションを追加すべきだ。
- ・ 目標値を設定してもそれを守るための手立てがどこまで有効か、それを計画に盛り込めるかが問題だ。
- ・ 問題個体さえいなければ個体数はさほど問題ではない。問題個体の増減の傾向が把握できていないので、現状認識のモニタリングが必要だ。
- ・ 行動段階 1 の個体を追い払い続けて結局救えなかった現状が明らかとなった。別のやり方を選択肢に加えるべきである。行動段階 1 とゾーン 3 があまり機能していなかった現実を踏まえ、次の管理計画に繋げる必要がある。
- ・ 行動段階 1 の個体の中で行動がエスカレートし駆除に至ったケースが多く記録されていると思うが、そういう問題個体の定義をきちんとした上で、有害個体としてリストアップしておく必要がある。
- ・ 問題個体の積極的な捕獲という前提で議論が進んでいるが、人間側の対策をきちんと実施した上でないと整合性が取れない。捕殺しやすくするための計画になってはいけない。
- ・ 利用者を管理するのではなく、利用者に参加してもらう計画でないと効果は上がらない。ヒグマは現在、社会資源となっており、ヒグマにより利益を享受している関係者もいる。そういう人達もステークホルダーに入れないと平行線をたどる。ヒグマの見せ方をコントロールする時期にきている。

## 第2回 知床半島ヒグマ保護管理方針検討会議

- ・捕獲数から導かれた生息数は幅が広く、これを基に計画を進めることに疑問を感じる。捕獲上限を設けるのは必要だが、それがなければ前に進まないのか議論が必要だ。1980年代の捕獲圧を上回らなければ絶滅することはないだろう。根拠が仮置きで捕獲上限が設定された状況で、上限を上回った場合にフィードバックできる仕組みはおそらくない。知床のヒグマを絶滅させないことが目標であるが、ここでは減少させないことが強く言われている。数が分からなくてもトレンドが分かればよいのではないか。
- ・70～80年代にどの程度の捕獲圧がかかっていたかは目安になる。
- ・ヒグマの捕殺数の把握のためには、ヒグマの数だけでなくドングリの状況やサケの遡上数、気象条件などと比較する必要がある。
- ・2021年までに絶滅しなければいいという考えでは、誰も納得しない。仮に2021年までの絶滅確率が2～3%だとしても2050年には絶滅確率がかなり高くなる。また80年代より捕獲圧が下がったとは言え、80年代の個体数が安定していたとは言えない。
- ・どんなに努力しても絶対的な数値は出せない。トレンドを追跡することが重要だ。
- ・メス75頭という数字はきちんと根拠に関する説明を記し、この数字ありきではない、毎年見直すということを明記した方が安全だ。
- ・密度指数と捕獲総数の両方の管理をおこなえば、密度指数一単位あたりの個体数が将来的に分かってくる可能性がある。
- ・人為的死亡だけでなく自然死亡も把握する必要がある。餌不足による死亡は人為的な影響の可能性もある。
- ・知床は世界自然遺産なので、絶滅させないというよりは、もう少し積極的に保護する高めの目標を設定したい。
- ・絶滅確率4%というのは相当高いと感じる。4%というリスクを認めて捕獲をしていると読み取られる。補足説明が必要だ。
- ・ゼニガタアザラシの例では絶滅リスクゼロを前提で議論を進めた。そうでなければ理解されなかった。「期間内であっても数値の見直しをする」と補記するべきだ。
- ・絶対的な個体数は分からないが、唯一、捕った数は分かる。捕獲に対するレスポンスをみるのが重要だ。
- ・捕獲上限、人為的死亡総数が上限を上回らないようにするには、人間側の行動をコントロールするしかない。人間側の不適切な対応を改めていく必要がある。
- ・農地に出る個体と国立公園内の人慣れ個体は属性が異なる。問題を解決するアプローチは分けて考えるべきだ。
- ・不適切な行動、悪質な行動をとる人に対してどういう対応をするか書かれていない。現状でできることについて整理する必要がある。ヒグマの餌になるものの管理という点では、電柵を張らないことも不適切な行動と言える。
- ・やむを得ない捕殺はあるが、不必要なヒグマの死亡件数と因果関係の情報をモニタリン

グする必要がある。こういうことがなければクマの死は避けられたということを釣り人にも伝え、地域ルールにする必要がある。

- ・第 1 期で個体数の動向をもっと把握するべきであった。モニタリング項目には個体数の動向の把握と問題個体数の動向の把握を必ず盛り込むべきである。
- ・第 1 期の繰り返しになることを危惧する。第 1 期は奇跡的に人身事故がなかった。期待目標を記載しても具体的に誰が実行するか書かれていなければだめだ。
- ・モニタリングの実行状況が項目ごとにわかるようにしてもらいたい。5 年後にはぜひ実現できるよう結果が得られるようにしてもらいたい。達成できなかった項目についてはなぜ達成できなかったか、状況が見えるように整理が必要だ。
- ・捕殺に至った個体の履歴をモニタリングする必要がある。

### 第 3 回 知床半島ヒグマ保護管理方針検討会議

- ・個体群動態の把握が第 2 期の重要課題と位置づけ、関係機関が連携して進める内容とした。
- ・目標 75 頭を超えた場合や超えそうな場合の具体的な対応策をどのようにするのか書かれていない。狩猟や駆除のコントロールなど、とれる方策は少ないが、何もしないのか。
- ・フィードバック管理が必要であるが、現実的に駆除数を減らすオプションはとりようがない。ならば人の立入を制限するなどヒグマと人との距離を離すための方策を記載するべきだ。捕獲数のコントロールだけの計画ではない。
- ・アクションプランを毎年作成し、それがどう実行されたか、されなかったかチェックする体制が必要だ。今まで手つかずの問題もアクションプランの中で何かしら前に進めるべきだ。
- ・ゾーン 3~4 のアクションプラン案がこれまでとほとんど変わっていない。クマ対策用のゴミ箱など 1 年に 1 基ずつでも設置すればいい。

### 第 2 回知床ヒグマ対策連絡会議

- ・個体数増減のトレンドの把握が必要。予算をかけず持続可能な調査として、糞カウント調査と最低確認メス数モニタリングを提案する。
- ・羅臼側の観光船の目撃情報も収集できる体制が必要。
- ・メス数モニタリングは親子の情報を収集。6~7 月に調査を集中させる。最終的に推定最少個体数と推定最大個体数を整理する。暫定コースを今年度設定し共有する。第 2 回 WG で確定させたい。平成 30 年度から調査実施を目指す。
- ・効果的な情報発信体制を検討していきたい。平成 30 年以降、実際の媒体を作成する予定。
- ・利用者と地域住民の 2 者に伝えるのが大きな目標。媒体（インターネット、紙面）によって伝わり方が違うことも考慮に入れる。
- ・事故に対する直接的な対応のマニュアルを整備していくべき。

- 知床半島ヒグマ管理計画がある旨を警察と共有し、事前に協議しておくことが必要。
- 利用自粛要請をする場合のような、事故になりかねないレベルの事例においても、マニュアルに記載されているとよい。
- 生物学的、被害対策的な現場検証ができるようにする。
- 対策連絡会議で決めておくべきことをリストアップしておく。
- 鉛ライフル弾の使用はヒグマ対策で不可欠のものであるから、条件付きで認めるべきであり、管理計画の中にも練り込む必要がある。